



Title	Shinto shrines in the Japanese sphere : centre, periphery, and beyond, 1868-1945 [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	清水, 佳理
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第13976号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78670
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Karli_Shimizu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：清水 佳里

審査委員 主査 教授 ゲーマン・ジェフリー・ジョセフ
副査 准教授 土田 映子
副査 教授 シートン・フィリップ（東京外国語大学国際日本学研究院）
副査 教授 ゾンターク・ミラ（立教大学文学部キリスト教学科）

学位論文題名

Shinto Shrines in the Japanese Sphere: Center, Periphery, and Beyond, 1868-1945.

（帝国日本における神社—領域の中心・周縁・境界を超えて 1868-1945年）

この論文は、明治維新から第二次世界大戦終結までの時代を対象に、本州・北海道・台湾・ハワイという三つの国・四つの地域における近代的制度としての神社が、日本の「新しい世俗性」の構築に関わり、それを帝国臣民が実践する場としての役割を担った過程を、四つのケース・スタディから明らかにするものである。著者は、膨大な量の日本語新聞・雑誌・旅行案内他の一次資料の緻密な分析と、関係者へのインタビューなどのフィールドワークにより、近代日本の神社の「世俗性」(secularity)を詳細に描き出す。日本国外の神社への関心から出発した著者の研究は、非宗教領域における神社の役割と、日本政府が取り組んだ近代的「世俗性」構築についての理解が、近代の神社の歴史的・社会的意義の把握には不可欠という仮説に発展している。

主要な問いは三点ある。第一に、近代の神社はどのように公的・歴史的・現代的な場所、すなわち世俗的な場所として扱われていたか。第二に、近代の神社は「空間」「時間」「倫理」に関する新しい感覚を浸透させることにより、いかにして日本的な世俗性(secularity)を日本臣民に伝えたか。第三に、近代の神社は植民地において、新しい皇土や臣民を日本的な世俗性に組み入れるのにどのように機能したかである。

第一章では、著者は世俗性という用語の概念的背景を説明している。「宗教」やそれに関連する近代的概念の成立は、近代ヨーロッパのキリスト教社会の、特定の系譜に起源を求められる。「宗教」(religion)や「世俗」(secular)という用語は中立的な分析カテゴリーではなく、「世俗主義」(secularism)による政治制度から定義された概念である。世俗性、すなわち日本政府による世俗主義的政治体制の中で広められた共通理解は、「世俗」に関する欧米の近代的概念に基づいたものであった。しかし、日本の「世俗」は神道や儒教の伝統を用い、日本の状況に適応させられた。これが日本の世俗性(Japanese secularity)である。

第二章では、上記の世俗性の概念を奈良県の橿原神宮に適用している。橿原神宮は神武天皇の即位の儀が行われた場所と伝えられていることから、日本の発祥地とされた。神社は「宗教」や「世俗」という近代的概念が19世紀後半に日本に採用され、日本の状況に合わせて修正されるのに伴い、日本の「新しい世俗性」の圏内にあるものとして

の様相を呈してきた。神社が公共的・歴史的・現代的な場所、すなわち世俗的な場所としての特徴を強めていく中で、橿原神宮は「空間」「時間」「倫理」という新しい日本の世俗性を促進するものでもあった。

第三章では北海道の神社について検討した。北海道総鎮守である札幌神社は、初期の段階では多種多様な習俗や組織との関係を築くが、日本的な世俗主義が発展するにつれそれらとの関係を断ち、橿原神宮と同様に非宗教圏に置かれるようになった。札幌神社の重要な役割は、北海道の唯一の官幣大社として、この新領土を皇国の一部に組み入れることであったことを示した。また、北海道護国神社の例では、宗教圏に置かれていた死者が神社の領域、すなわち世俗に取り入れられていく過程を分析した。

第四章では日本統治下の台湾の神社について検討した。北海道開拓の成功例に倣い、台湾神宮も非宗教的な場所として日本の新しい世俗を新皇民に伝え、台湾を新皇土として帝国に組み入れる役割を担った。日本の神社が近代化以前からの原型の上に築かれたのに対し、台湾の神社は日本国家の主導で設置・運営された機関であったが、総督府は台湾の文化的要素をも日本の新しい世俗性に溶け込ませた。しかし、神社の理念は、後には台湾の人々の内地人への「同化」を促進する方向へ変化していった。

第五章ではハワイの神社を取り上げ、ハワイの日本人移民がアメリカ合衆国と日本で異なる「宗教」と「世俗」の捉え方の狭間で、巧みにこれらの違いを利用しながら神社を生き延びさせてきたことを示した。

本論文は先行研究ではしばしば見逃されてきた、内地の神社と海外の神社との重要な類似性を示した。植民地にある神社は完全なる本国との同化を促進した「同化の神学」を理念とした一方で、本国でも海外でも神社は臣民を近代的な良き皇民へと導くように機能した。さらに、帝国の影響の外にあった海外の神社の事例は、日本とアメリカの異なる世俗主義の対立を、神社がどのように乗り越えていったかを示している。神社の事例を用いることで、近代国家が新しく獲得した国土や国民を、世俗主義の制度を利用して概念的に同化していった過程を見る枠組を提供していることが、この論文の最大の貢献の一つであろう。

さらに、この論文の評価すべき点は、一本の論文の中に異なる国と地域を取り上げながら、緻密な文献研究とフィールドワークにより、近代日本の帝国化における神社の「世俗性」を詳細に提示したことである。第二章の橿原神宮、第五章のハワイの神社に関する内容はそれぞれ個別の論文として発表されており、抽象的な概念枠組を巧みに用いている点が評価され、それぞれ高いインパクト・ファクターの国際ジャーナルに掲載された。にもかかわらず、論文の統一性を優先するために、本博士論文からはその内容の大部分が割愛されていることから、今後の研究の広がりの可能性が伺える。本研究は今後、専門書として公刊され、帝国の歴史研究に新たな貢献をなすものとして期待される。

よって、著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。